

「一筆啓上仕候 (いっぴつけいじょうつかまつり)」と聞きなされるさえずりで知られるホオジロは、日本の里山や草地でごく身近に見られる小鳥ですが、こうして足もとに目を向けると、その姿には思いのほか気品があります。写真の鳥は、白い頬と眉斑、目を通る黒い線がはっきりしたオスです。繁殖期のオスは顔の白黒模様がいつそう鮮明になり、自らの縄張りを主張しながら、枝先や灌木の上でよく声を響かせます。春から初夏にかけての野山で耳にするあの澄んだ声は、日本の季節の音風景の一つとも言えるでしょう。

この個体が立っている地面の、一面に敷きつめられているのはカラマツの落ち葉です。広葉樹の葉とは異なり、細い針のような葉が褐色のじゅうたんとなって林床を覆う光景は、北軽井沢や高原のカラマツ林ならではの光景です。黄金色に紅葉したのちに一気に葉を落とすカラマツは、日本では珍しい落葉性の針葉樹であり、その林床には独特の明るさと静けさがあります。ホオジロはそうした林縁や草地、疎林を好み、地上で種子や小さな昆虫を探しながら、ぴょんぴょんと軽やかに歩き回ります。

春のこの時期、オスは繁殖の季節を迎え、さえずりだけでなく、その姿そのものもまた重要な「看板」です。くっきりした顔模様は、メスへのアピールであると同時に、他のオスへの存在誇示でもあります。冬には群れで比較的静かに過ごすことの多いホオジロも、春には一転して声高らかな季節の主役になります。

カラマツの落ち葉の上に立つホオジロは、派手さこそないものの、日本の高原の春を象徴する存在です。足もとには昨年の季節の名残である褐色の落葉があり、その上で新しい命の季節を生きる小鳥がいる。冬を越えた林に、再び繁殖の時間が動き始めたことを、この小さな鳥は静かに、しかし確かに告げているのです。

(2026年5月上旬／北軽井沢)

